

The 17th MELTA International Conference 2008 に参加して

神保 尚武（副会長・早稲田大学教授）

### JACET と MELTA の交流協定の締結

Malaysian English Language Teaching Association との交流協定を 5 月 27 日付けで締結した。26 日の午後に、森住会長の署名入りの協定書を小生が提示し、MELTA の第 4 代会長の Dr. Ganakumaran Subramaniam が承認し、署名をした。新聞記者会見が行われ、JACET と MELTA 及び Thailand TESOL と MELTA との交流計画が発表された。

MELTA は 1982 に創立され、現在の会員は小・中・高・大の英語教員で構成され、1,000 人規模の学会である。

### 第 17 回国際大会

テーマは English Language and Multiple Literacies で、3 地域で 2 日間づつの大会を移動式で開催するという方式であった。日程と開催地は、最初が 5 月 26-27 日でペナン、次が 30-31 日でセランガ州のミネス、最後が 6 月 5-6 日でサバ州のコタ・キンバルであった。小生はペナンの The Gurney Resort Hotel を会場とした大会に参加した。

参加した主な講演や発表について簡単に紹介する。

Dr. Kuldip Kaur (Open University Malaysia) の講演は、*Learning, Literacy and Multiliteracies: Considerations for ESL Teacher Education* という題であった。マレーシアという多言語・多文化社会での ESL 教員教育がかかえる問題に焦点があてられた。注意深く準備された多様な教員教育のメニューが必要であると述べた。

Dr. William Littlewood (Hong Kong Institute of Education) は、*Outcomes-Based Learning and Assessment: How Compatible are They with the Principles and Practice of Second Language Learning?* という題で発表した。最近のシラバス作成において、結果を重視する傾向が顕著になってきている。これは、1980 年代以前の産出基盤アプローチ(product-based approach)への回帰に見える。しかし、産出自体が過程という観点から提示されているのである。コミュニケーション能力を評価する際の信頼度の高い基準が学習者の産出とその記述によって可能であろうかという問題が議論された。

Dr. Malachi Edwin Vethamani (University Putra Malaysia, MELTA 前会長) は、*Resource-based Programmes in English Language Education: Concept, Implementation and Effectiveness* という題で講演した。中等教育での英語教育を高めるためにマレーシア教育省が導入した 2 つのプログラムが紹介された。1 つは文学教材 (Literature in English component) の推奨である。文学がいかにかに有効で有力な教材たりうるかが発表された。2 番目は、科学技術英語の必要性である。現代社会を生き抜くためには科学技術英語が必須あることが確認された。

小生は千葉商科大学の酒井志延教授と *A Study on the English Literacy of English Teachers in Secondary Schools in Japan* と題して共同発表した。教員を「初任者」、「中堅教員」、及び「指導教員」に分けて、各段階における適切な英語力に関しての日本全国調査研究について報告した。課題として、効果的な授業展開をするために必要な「英語力」を基準化することと、教員の英語力の維持・向上のための目標設定と目標達成への動機付けを図ることの重要性を指摘し、理解を得た。